

.....
～年頭のご挨拶～

北陸農政局長 植野 栄治（うえの えいじ）
.....

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

金沢に赴任して初めての冬を迎えています。こちらには「弁当忘れても傘忘れるな」という格言があると聞きました。昨年十二月のある朝、日が差していたため傘は持たず、弁当は持って家を出たところ、途中で雨に降られ、職場に着いたときには体も弁当もびしょびしょに濡れていました。それまでどこか他人事と受け止めていたこの格言が自身の実感として胸に落ちた出来事でした。

仕事を振り返りますと、能登地域をはじめ、自然災害や社会構造の変化という、避けて通れない現実に合わせて向き合う一年となりました。その中で強く感じたのは、行政ができることは決して「正解を示すこと」だけではなく、地域の一人ひとりが未来の当事者として関わる場をつくることである、ということです。

現在、各地で進められている地域計画は、まさにその象徴的な取組だと考えています。地域計画は、国や行政が完成形を用意するものではありません。地域の農業者や関係機関、そして次の世代が、「この農地をどう使い、どう守り、どう次につなぐのか」を自分ごととして考え、議論を重ねながら、少しずつ磨き上げていくプロセスこそが重要です。

未来の地域農業の姿を当事者として考えることは、決して容易なことではありません。目の前のことだけで精一杯で、「あとはなんとかなるだろう」と思いたくなる場面もあるでしょう。しかし、人は十年後には確実に十年歳を重ねます。冒頭の話のとおり、雨が降り出してからでは遅い。時間は、後から取り戻すことができないのです。

行政の役割は、そうした対話と挑戦を支え、安心して議論できる土台を整えることにあります。地域計画のブラッシュアップをはじめ、地域の皆さまと共に考え、学び、前に進む農政を、北陸農政局は実践してまいります。このメールマガジンも、その一助となるよう、現場の取組や政策を丁寧にお伝えしていきたいと思えます。

本年が、北陸の農業と地域にとって、未来への手応えを一つひとつ積み上げる年となることを願い、新年のご挨拶といたします。